

書 評

掛谷 誠・伊谷樹一編、『アフリカ地域研究と農村開発』京都大学学術出版会，2011 年，420 p.

重富真一*

本書は、研究者がアフリカの農村に入ってその社会を調査研究するだけでなく、地域開発にまで参加し、その経験からアフリカ社会をさらに深く理解しようとした、その成果である。ここでの開発実践は、1999 年から 5 年間、JICA がタンザニア、ソコイネ農業大学の協力の下におこなった地域開発プロジェクトで、それに関わった筆者等が 2004 年から科学研究費補助金を得ておこなった研究成果が本書にまとめられた。地域研究の延長に開発実践をおこなった、という点が本書の新味であり、そこに本論評の焦点も当てられる。

本書には節ごとに数えると 17 本の独立論文が所収されており、ここでそれらひとつひとつを紹介する余裕はない。また評者はアフリカ研究を専門とする者ではないので、詳細に現地事情を紹介した個々の論文について検討する任には適さない。そこで、本全体のメッセージを紹介し、それに対する評者のコメントを記す中で、必要に応じて個別の事例研究にも言及していきたい。

さて、評者が理解するところ、本書のおおまかな主張は以下のようなものである。

(1) アフリカの地域社会を理解するには、

アフリカ社会の特色を踏まえた調査研究が重要である。

- (2) 開発実践をおこなううえではさらに個別対象地域の特性（焦点特性）を捉える必要がある。
- (3) 地域社会にはそれぞれ独自の潜在力（在来性のポテンシャル）があり、それを引き出す開発実践が必要である。焦点特性はそうした潜在力が何かを典型的に示す。
- (4) しかし実践では何が起きるかわからないし、むしろ意図とは別のことが起きることこそアフリカ的である。そうした予想に反した出来事を無視せず、その後の開発実践に役立てねばならない。
- (5) そのために重要なのは研究と開発実践の間をつなぐ試行（試験的実施）過程である。
- (6) 以上のような実践をおこなえば、発展メカニズムが内在化し、地域の持続的な発展につながる。

上記の番号に沿って、著者等の主張を個別に検討しよう。

(1) アフリカ社会の理解については、序章でそのための概念が示されている。たとえば、最小生計努力、平準化機構、エクステンシブな生活様式、内的フロンティア世界、情の経済、モラルエコノミーなど。これらの中で、後の事例研究でもしばしば登場し、また重要と思われるのは、「平準化機構」である。平準化とはより多くもつ者がもたざる者に食料を分け与えるべきという規範のことで、この概念を使って新しい技術や作物の普及のあ

* アジア経済研究所地域研究センター

り方も説明される。つまりイノベーションが広まるのは、皆が分かち合うからだ、という。

しかし平準化機構は現金についても働くのだろうか。本書を読む限りアフリカ社会でも現金経済の浸透は相当に進んでいる。金は食料と違っていくらあっても困らない。そういう社会になっているにも拘らず、平準化機構が農村住民の経済にどの程度意味をもつのだろうか。また仮に新たな作物・技術が村の皆に普及したとしても、それが即、人々の経済を平準化する訳ではない。経営規模、技術、コネなど個別農家の違いが成果にはっきりと現れる作物・技術が広まれば、むしろ格差は拡大する。しかし本書ではそうした批判的検討はなされていない。

(2) 焦点特性とは本書のキー概念である。開発対象地域の焦点となる特性のことであり、それを見出すことで対象地域の在来の能力を引き出すことにもなる、という。本書では2つの調査地域それぞれに、焦点特性が説明される。マテンゴ高地の場合は、ンタンボという川の支流などで区切られた山腹をなす地形単位で、ひとつの親族集団が占有し、生産・生活の単位となっているものがそれである。もうひとつはウソチェ村の焦点特性で、「疎林・ウシ・水田稲作の複合」と「民族の共生」がそれにあたる。疎林・ウシ・水田稲作は循環系をなしており、そのバランスを維持することが重要で、そのためには異なった民族が平和に共存する必要がある。

しかしここで示された2つの焦点特性は、まったく違うカテゴリーに属する概念である(一方は地域単位、他方は生産部門間の生態

的關係と民族間関係)。どうやら調査地ごとにどういう概念を当てはめるかは、研究者の思いつきに任せられているようだ。だから焦点特性は、ひとつの地域社会を長く深く調査しなければ見つからないし、地域社会ごとにまったく異なる。言い換えれば、この手の調査研究手法は汎用性に難がある。

それぞれの焦点特性についても疑問に思う点がある。ンタンボを焦点特性としながら、実際の開発実践では行政村を単位に実践をし(ハイδροミル設置)、しかも成功している。それならば焦点特性とは何だったのか。ウソチェ村についていえば、牛車が焦点特性の象徴だというのだが、10回の牛車利用のうち、生態系に関係がありそうな牛糞運搬は1回のみであり、ほとんどは煉瓦の運搬であった。

(3) 「在来性のポテンシャルに根ざした開発」という主張は、「内発的發展」や「地域に根ざした發展」と同じであり、それ自体はすでに言い古された言説である。大切なのは、地域社会にある諸条件の中から開発のポテンシャルとなる条件を見つけ出すことであろう。それを見つける方法が、焦点特性なのだと言者は理解したのだが、焦点特性には前項で述べたような問題点がある。

(4) 意図とは別の結果が生まれることを、筆者等は「創發性」と名付け、アフリカの内発的發展を支える特性だという。あるいは偶然に起きたことを開発に役立てる、という意味で「偶然の必然化」ともいう。

しかし、ものごとはなかなか意図どおりに進まないものである。それがなぜ「アフリカ的」なのだろうか。また仮に意図どおりの

結果が出た場合、筆者等はそれをどう評価するのか。創発的、偶発的であるか否かと、起きた現象が開発にとって肯定的か否かということは、別のことである。

(5) さてそのような意図と異なる現象が起きたとき、それを計画にフィードバックする過程が必要である。一般に物事を実施するときには、Plan (計画) —Do (実施) —See (評価) のサイクルを繰り返して進んでいく。本書の特色は、そのサイクルを調査研究段階、試行段階、実践段階に分けたところにある。そして段階ごとに計画、実施、評価の過程を置き、それらを線でつないで、その線の形から NOW 型モデルと名付けて提唱している。このうち O の部分が試行段階であり、このモデルの眼目である。なぜ O かといえば、評価から計画へのフィードバック線があるため、線が輪を描くからである。

ここで不思議なのは、調査研究段階と実践段階にこのフィードバック線がないことである。まさかフィードバックが不要というわけではないだろうから、形を NOW とするために省略されたのであろう。もしその線を描けばモデルは OIOVO 型になってしまい、たしかにカッコがよくない。しかしモデルを美しくするためにフィードバック線を消し去るのは本末転倒である。フィードバックは「偶然の必然化」のために不可欠の行為のほゞである。

そもそも「開発実践をする場合に、試行段階が重要」という主張は、目新しいものであろうか。むしろ、開発事業に限らず大規模な実践をする前には、何らかのモデル事業、パ

イロット事業をおこなうのが普通であろう。

(6) 開発の動因を内在化するということは、開発援助の重要な課題である。さもなければ開発はプロジェクトの実施期間中にしか起きず、被援助者の依存症を招くだけだからである。この問題を強く意識して、本書では開発の進行過程を追いかけ、それが立ち上がり—昂揚—沈静という段階を踏んでいるとした。何事も、新しいことを始めると、それが軌道に乗れば昂揚感が出て、そのうちそれは静まって行くであろう。だからそれ自体は何ら新しいことではない。むしろ本書の特色は、この沈静化段階を「開発の内在化」と捉えたところにある。

しかし沈静化するかわち内在化であろうか。事例研究のひとつは、農民グループの活動に一種の「飽き」がみられるとし、これを「沈滞」ではなく「日常化」(内在化) だというのだが、根拠はどこにも示されていない。本プロジェクトの実施過程をみると、事業成功に不可欠な資源や助言を支援者がしばしば住民に与えている。ハイドロミル事業の資金やそれが内部対立を引き起こしたときの助言は外部者によるものである。養魚事業を始めたと思った住民は、自分たちで資源を調達するのではなく外部者に頼ってきた。牛車も援助者が与えた。その利用管理について住民の対立があると、やはり援助者が助言をしている。こうした援助が悪いというのではない。援助の結果が、内在化したか、それとも依存症を作ったかを、いかなる根拠や指標で判断するかを筆者等に問いたいのである。

農村開発は地域住民が開発の主体となるこ

とで初めて持続的・自立的となる。そこにつながる開発援助のためには、対象地域住民の行動を律する仕組みについて深い理解が必要である。この論理に立って、研究者自らが研究と開発実践をつなごうとした本書の試みは高く評価できる。

しかし本書はそうした仕組みの解明にどこまで成功したのだろうか。持続的開発の実現、すなわち筆者等のいう「内在化」が本当にできたのか、あるいはどうすればできるのかは示されていない。地域社会の仕組みは「焦点特性」を通して把握されるようだが、本書で示された2つの焦点特性は、概念のカテゴリーがそれぞれ違っていて、なぜそうした焦点特性が導き出されるのか、調査をおこなった当事者以外にはわからない。焦点特性は、筆者等のように対象地域を徹底的に調べた人にしかみえてこないであろう。

こういう焦点特性の把握方法に依拠した開発援助は、面的な広がりをもち得ない。NGOが途上国のいろいろな村ですばらしい実践をしているけれども、いつまで経ってもそれらが「成功事例」に留まるのと同じである。研究者が実践に関わるなどという方法も、めったにできることではない。

いま研究者に求められているのは、地域社会の仕組みをどう把握するのか、開発実践に携わろうとする人なら誰にでもわかる仕方で示すことである。ごく普通の地方行政官、地域リーダー、フィールドワーカーが、自分の担当する地域の「焦点特性」をつかむ方法を示すことである。

佐川 徹.『暴力と歓待の民族誌—東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』昭和堂, 2011年, 437p.

曾我 亨*

待望の書物が刊行された。佐川による『暴力と歓待の民族誌』である。佐川のすばらしい学会発表を聞いた者は、誰もがその全貌をまとまった形で読みたいと待ち望んでいたに違いない。本書は2009年に京都大学に提出された博士論文をもとに書かれている。この鮮烈な書物を、世界中の学者に先駆けて日本語で読めるとは、なんと幸運なことだろう。

以下、本書の内容を示し、論評していこう。本書はエチオピアの深南西部にくらす牧畜民ダサネッチを対象としている。好戦的とされる牧畜社会の戦争と平和を真正面から取り上げている。本書の構成は次のとおりである。

第1章 序論

第2章 ダサネッチの概要

第3章 国家と集団間関係

第4章 戦争経験と自己決定

第5章 横断的紐帯と境界

第6章 外部介入と平和維持

第7章 結論

第1章においては、戦争と平和をめぐる本書の立ち位置について説明されている。まず、戦争と平和に関する従来の人類学的研究の多くが、人間の本性を好戦性にもとめるホップズ的人間観と、平和性にもとめるル

* 弘前大学人文学部

ソー的人間観のいずれかに依っていることが示される。しかし佐川は、戦争と平和を対立的にあつかうやり方に終止符を打つ。好戦性と平和性を相互に作用し合う連続的な過程と捉え、友好的な相互作用のなかに敵対関係に至る端緒を、逆に敵対関係のなかに友好的な関係に至る端緒を見出そうというのが本書の立場なのである。

そのうえで佐川は3つの研究課題を設定する。ひとつは、個人を分析の中心にすえることである。先行研究のなかには、戦争の役割を、集団の自律性を維持させるためとするものもある。しかし戦争もまた、人々の意思決定や行為選択の複雑な相互作用をとおして遂行されている。佐川は、戦争におもむく個人の経験に焦点を当て、その経験が次の戦争に際して個々人の選択にいかなる影響を与えているのかを明らかにしようとする。2つ目の課題は、個人を分析の中心にすえることで、戦争が発生していく過程と、そこから平和が回復されていく過程を明らかにすることである。個人的な契機から発生する暴力がいかに発現し、いかに消散するのか。集団の境界概念に注意をはらいながら解明していく。3つ目の課題は、平和構築を目指す外部からの介入の人類学的評価である。好戦的とされる牧畜社会には、近年、国家やNPOなどが平和構築のための介入を強めている。戦争状態から平和を回復させる牧畜社会のやり方と対比しながら、外部からの介入の特徴を明らかにする。

第2章にはダサネッチの概要として、生業様式、社会・政治構造、ライフサイクル、

ジェンダー、近隣集団との関係がまとめられている。

第3章では国家と集団間の関係について、歴史的に再構成されている。この章ではとくに、東アフリカの牧畜社会にひろく張りめぐらされた交易ネットワークを念頭に、銃がどのように拡散していったかに注意している。銃は牧畜社会に不均質に拡散していったが、入手できる銃の性能と数の違いによって、諸民族の間に軍事的階層が作りだされていった。さらに自動小銃が登場すると、牧畜民は「カラシニコフに酔っ」たかのように暴力にとりつかれていった。とはいえ佐川は、銃の流入によって紛争が激化してはいるものの、敵の殲滅を目指した全面戦争とはなっていないこと、さらに今なお、近隣民族との間には個人的な友好関係が存在していることを指摘している。

第4章と第5章は本書の中核であり、個人に焦点を当てた分析が展開される。まず第4章では、戦争のやり方、人々を戦争へと動員する文化装置、敵の表象のされ方などが述べられた後、戦争参加への自己決定について記されている。佐川は174名の男性に対して詳細なインタビュー調査をおこなった。そして戦争に参加した回数には、人によって大きなばらつきがあることを見出した。そしてこのばらつきが年齢組織や社会的地位などの違いによって生み出されるのではないこと、またほぼ全ての男性が、少なくとも一度は戦争に行った後、ある時期から戦争へ行かなくなることを明らかにした。

なぜ彼らはある時期から戦争に行かなくな

るのだろうか。それには過去の戦争体験が強く影響している。ダサネッチは戦場では一丸となって闘うことを理想とする。ところが実際には、傷ついた仲間を見捨てて逃げたり、略奪した家畜をめぐる争いあつたりすることも少なくない。こうした経験が、彼らに戦争を忌避させるようになるのである。

ダサネッチは東アフリカの他の牧畜社会と同様、「個人主義的」な人間観を有しており、ある者が戦争に行かないと決定しても、周囲の者はその決定をただ受け入れるだけだという。戦争に行かないからといって、社会から排除されたり憶病者とののしられたりすることはない。しかし同様に、戦争に行く者を止めることもできない。ダサネッチにおいて戦争は、個人的な自己決定の集積によって発動するのであり、集団が個人を強制的に動員しているのではないのである。

第5章ではダサネッチと近隣民族との流動的な関係について分析している。ダサネッチは近隣民族との間で、家畜を贈ったり、歓待したり、相互に往来することで個人的な友人関係を結んでいる。こうした友人関係は、長年戦いを重ねてきた「敵」との間につくられることが多いという。集団の境界付近に広がる放牧地での出会いが友人関係の端緒となるのである。一方で、ともに生活するとトラブルは避けられない。関係が悪化するにつれて人々はたがいに自らの土地へと引き上げていく。緊張が高まると儀礼や呪詛がおこなわれる。かくして「敵」と「われわれ」の境界が形成されていくのである。

さて、戦争が一段落すると、今度は平和儀

礼をおこなうために、人々の往来が復活する。最初に敵地をおとずれるのは、「敵」との親密な個人関係を有する者である。やがて人々は相互に訪問し合い、友人関係を結んでいく。ダサネッチと近隣民族においては、戦争と平和が振り子のように動的に現れる。戦争は平和のなかから生まれ、平和は戦争のなかから生まれる。本書の主張する、戦争と平和の分かちがたい関係が鮮やかに示される。

第6章では、平和構築にむけた外部からの介入についてまとめられている。佐川は、紛争を恒久的に解決しようとするのではなく、紛争を平和に転換し、その状態を持続的に維持し続ける方法を模索する。ダサネッチが平和儀礼で強調するように、彼らは近隣民族とともに共存してきた。それは紛争の原因にもなったが、平和に向かうときの原動力にもなっていた。近年、エチオピアでは、民族ごとに行政区を定めた結果、かえって諸民族の対立や紛争が増えつつある。佐川はこうした政治状況において、民族集団を空間的に分離するのではなく、諸民族の個人的な相互往来を前提にした介入の重要性を指摘している。

第7章では、各章の議論をまとめている。自動小銃が拡散して以来、東アフリカの牧畜社会は無秩序化しているかのように語られる。しかし佐川はダサネッチの人々の秩序維持の営みを強調し、そのローカルなポテンシャルを引き出すことの重要性を指摘している。

以上、駆足で内容を紹介してきた。本書は充実した民族誌的データに基づいて議論が進められており、非常に読み応えがある。たと

えば第2章は単にダサネッチの概要を示すだけの章であるはずだが、近隣民族について描かれた民族誌的データと佐川が集めたデータとが綿密に突き合わされ、ダサネッチの特徴が鮮やかに示される。さらに佐川の綿密な作業をみていると、逆に他の民族誌家のデータや解釈が疑わしく思えてくるほどである。東アフリカの牧畜社会を研究する者にとって、本書は比較民族誌的記述の新たな基準となるだろう。

次に特筆すべきは、個人を分析単位にすえつつ戦争という集合的实践を扱ったことである。マイクロ人類学を提唱する田中雅一[2006]は、従来の人類学が鳥瞰的な高みに立った全体論を指向してきたことを批判し、高みに上がるという誘惑を拒否する。あえて「虫瞰的」な立ち位置をとることで、人々の抵抗や想像力、身体や感情を明らかにし、これらを起点に世界観や国家などのマクロな領域を問い返すというのである。確かに全体論的な見方を破棄することで、マイクロ人類学は大きな可能性を手に入れた。しかしその一方で、マイクロ人類学は国家や集団が主体となっておこなう政治的決定や組織的実践を研究対象から外すことで、それを特権化してしまったともいえないだろうか。国家やグローバリゼーションを生きる個人の抵抗を描くことはできるが、その個人はあまりに「無力」で、かえって国家やグローバルな力の強靱さが意識されてしまうのである。これに対して佐川は、戦争や平和という集合的实践が、個々人の意思決定の蓄積と相互交渉によって生成することを明らかにした。ミクロな分析を徹底

することで、マクロな領域との動的な関係を描き出せたことが本書の魅力的な点である。

さらに付け加えるならば、本書は個人に注目することにより、平和から戦争が生まれ、戦争から平和が生まれ出される過程を描き出すことに成功した。リーチ[1987]の『高地ビルマの政治体系』は、2つの政治形態の動的な関係を明らかにしたとして高い評価を得ているが、実のところ、ヒエラルキカルな政治形態と平等的な政治形態がどのように転換していくのか、具体的に解明したわけではない。本書は、リーチの古典的名作が提起した課題に、現代的な解答を示したともいえるだろう。

ただし、こうして導き出された結論が、東アフリカの牧畜社会全体にどれほど適用可能であるかは慎重に検討すべきだろう。もっともこれは佐川の課題というよりは、この挑戦的な本書を手にした我々の課題というべきである。本書においても指摘されているように、近年、牧畜社会は政治化を強め、エスノ・ナショナリズムが勃興しつつある。従来の家畜をめぐる紛争に代わって、他民族への嫌がらせを目的とした低強度の、しかし持続的な紛争がおこなわれるようになってきた。これは自民族中心主義的なアイデンティティ・ポリティックスにかかわる目標を達成するための紛争であり、カルドー[2003]がよぶ「新しい戦争」の特徴を備えている。こうした状況にあっても、個人を分析の中心にすえて戦争を記述できるのか、あるいは逆にこうした戦争を記述する際に、個人のどのような行動に注目すれば良いのか、我々は考

える必要がある。

また佐川は、第6章で外部からの介入について考察しているが、ここで取り上げられた介入の事例は、いずれも家畜をめぐる紛争を対象としている。基本的にこれらの紛争は、家畜を奪ってしまえば収束に向かうような単発型の紛争といえる。これに対し「新しい戦争」では、相手に恐怖を与え続けることに目的がおかれ、小規模の殺人が連続する持続型の紛争である。今後は、こうした紛争への介入が中心となってくるだろう。そのとき佐川のいうように、組織や法に還元されない個人的な関係を平和維持の基盤にすることが可能なのだろうか。我々は、佐川の主張を繰り返し吟味しつつ、「新しい戦争」を克服する（あるいは「新しい戦争」とも折りあえる）ローカルなポテンシャルを探していかなければならないだろう。

本書は、牧畜社会の戦争と平和の動的な関係を題材に、紛争転換の方向性を示している。紛争への対処という現代的な課題に対して、人類学的な解答を示す野心的な研究となっている。また、その内容は牧畜社会に限定したものであるが、世界中で起きている紛争についても考えさせられる内容となっている。本書が一日もはやく外国語に翻訳され、世界中の研究者に読まれることを期待したい。

引用文献

カルダー, メアリー. 2003 [1999]. 『新戦争論—グローバル時代の組織的暴力』山本武彦・渡部正樹訳, 岩波書店。

リーチ, R. エドモンド. 1987 [1954]. 『高地ビルマの政治体系』関本照夫訳, 弘文堂。

田中雅一. 2006. 「序論 ミクロ人類学の課題」
田中雅一・松田素二共編『ミクロ人類学の実践 エージェンシー／ネットワーク／身体』世界思想社, 1-37。

小川さやか. 『都市を生きぬくための狡知—タンザニアの零細商人マチングの民族誌』世界思想社, 2011年, 398 p.

平野（野元）美佐*

本書は、タンザニア第2の人口規模をもつムワンザ市における、「マチング」と呼ばれる零細商人、とくに古着商人の世界を詳細に記述・分析した第一級の民族誌である。

著者は、自ら古着を行商し、市場に露店を開き、小売商たちに古着を卸す中間卸売商を経験してきた。このミクロな「実践観察」と多数の商人への聞き取りを中心に得られたデータから構成された本書は、マチングの世界を臨場感と説得力をもって描き出している。

本書は、序論部、古着商人の商実践を詳述し分析した第I部、マチングが誕生してから今日までの商慣行の変遷を追った第II部、マチングをとりまく路上空間を分析した第III部、そして結論部からなる。

序論部は、序章「マチングと都市を生きぬくための狡知」、第1章「ムワンザ市の古着商人と調査方法」、第2章「マチングの商世

* 天理大学国際学部

界」から構成されている。

序章では、はじめに、マチンガの商実践を「ウジャンジャ（狡知）」に着目しながら明らかにする、という本書の目的が述べられ、「零細企業家としてのマチンガ」と「路上商人としてのマチンガ」に分けて先行研究の検討がなされる。著者は、「アフリカ都市の零細商売を、丁寧かつ詳細に記述し分析することは、じつは従来のインフォーマルセクター研究、零細企業家研究、アフリカ都市人類学のいずれにおいても、ほとんどなされてこなかった」（p. 20）とし、マチンガの商実践と商売をめぐる関係性を、微視的、空間的、歴史的に明らかにするという本書の独自性を述べる。

第 1 章では、ムワンザ市の古着流通の仕組みと、卸売商、中間卸売商、小売商の属性、資本規模が説明される。古着を輸入・販売する卸売商はほとんどがインド・パキスタン系であり、アフリカ系は中間卸売商、小売商に限られ、両者の間に大きな隔りがあるという。

第 2 章では、マチンガの流動性の激しさ、副業による生計の多様化、匿名性の高さなどが論じられる。

続いて第 I 部「騙しあい助けあう狡知」は、第 3 章「都市を航海する」、第 4 章「ウジャンジャ」、第 5 章「仲間のあいだで稼ぐ」で構成されている。

第 3 章は、「一定期間後に代金を受け取る約束で品物を販売する『掛け売り』を、文書を交わす正式な契約関係を結ばずにおこなう信用取引」（p. 80）であるマリ・カウリにつ

いて論じられる。マリ・カウリは、中間卸売商には、商品を迅速に売りさばき販売価格を調整できるなどの利点があり、小売商には元手なしに仕入れができ、売れ残りを返品できるなどの利点がある。しかし両者の緊張が高まると、小売商によるサボタージュや持ち逃げなど信用不履行が生じるリスクの高いものである。

リスクを抱える中間卸売商は、小売商の属性や持ち逃げの過去よりも、「ウジャンジャを備えた人間」かどうかを重視する。ウジャンジャを備えた人間は、警察の取り締まりをかわし、売れにくい品も消費者に巧みに売りつけることができるからである。また小売商にとっては、ウジャンジャは決してなくならない「資本」である。

第 4 章では、ウジャンジャについて詳述される。マチンガにとってウジャンジャは、日常的なコミュニケーションで培われる機知であり、難あるブラウスを安く仕入れて汚れの上に値札シールを貼る、雨が降り出し暗くなった時を見計らって悪いシャツを売るなどがその事例である（こう書くとその「深さ」は伝わらないが）。ウジャンジャは、ポーズという意図的、非意図的の自己呈示と密接な関係にあり、ある種の演技力が含意される。彼らはそれぞれのポーズとウジャンジャを「創意工夫と相互承認にもとづき、関係的に生み出」（p. 155）している。

第 5 章も引き続きウジャンジャについて論じられる。小売商は客との交渉で、客と自分の「リジキ（その日を生き延びるために最低限必要なもの）」を考慮し販売価格を決定

し、また中間卸売商に対しては、その考えを見極め販売枚数のバランスを操作する。また中間卸売商と小売商の駆け引きでは、互いに嘘や誇張をまじえ、相手の経営・生活状況をさぐる。彼らのウジャンジャへの信頼は、「親密性を操作することで、『カネ儲け』と『配慮』の同時充足を実現する『仲間』という関係性を、適度なバランス感覚で維持できることにあるのではないだろうか」(p. 187)と著者は述べる。

第Ⅱ部「活路をひらく狡知」は、第6章『『ネズミの道』から『連携の道』へ』と第7章「商慣行の変化にみる自律性と対等性」からなる。

第6章では、タンザニアにおける古着密輸取引の始まり(1970年代)から現在までの政治経済的状况の変化のなか、マチンガがどのように誕生し、商慣行を変化させてきたかが論じられる。

第7章では、2003年以降、古着商人をとりまく急激な状況変化により、彼らがウジャンジャを駆使しながら、マリ・カウリ取引と現金取引の併用という新しい商慣行を生み出し、対応していることが論じられる。

第Ⅲ部「空間を織りなす狡知」は、第8章「弾圧と暴動」と第9章『『あいだ』で生きる』からなる。

第8章では、マチンガへの弾圧とそれに反発した暴動について述べられる。つねに政府にとって弾圧や排除の対象であったマチンガは2006年、路上商人の公設市場への移動を目的にしたムワンザ市の「路上商人一斉検挙」に対する反発から、暴動を起こす。マチ

ンガはその後もし当局の取り締まりに「いたちごっこ」を続けるが、彼らが公設市場に移動しない理由は、資金やネットワークの欠如など「不確実性への対処」によるものだと論じられる。

第9章では、マチンガが周りの人びと、商店主、消費者、警官などといかなる関係をもち、また、マチンガが路上空間でいかなる役割を果たしているかが論じられる。マチンガは、それぞれのアクターとの関係において両義的であり、その「あいだ」でバランスを保ちながら、自律的な活動領域を保っているという。

結論部の終章では、「ウジャンジャ・エコノミー」と題した結論が述べられる。マチンガの商実践は、ウジャンジャにより、裏切りと支援、騙しあいと助けあいなど、相反する実践のバランスの上になりたち、「その時その場で余裕のない者／不満を抱えている者へと、マージンを引いた商品・カネ・支援を回していくことで、状況対応的に諸アクター間の必要性を埋め合わせするエージェントとして利益を稼」(p. 325)ぐことである。

そしてマチンガは、さまざまな商実践の場面をウジャンジャの発動にゆだね、「全体がうまくいっている」と評価する。彼らのなかで、「有限の資源や空間を分かちあう何らかの全体性が想像され、彼らの行為はその「全体性に位置づけられ、ある種の『公共的』な意味をなしている」(p. 327)。ウジャンジャ・エコノミーとは、「(この)人間相互のかかわりあいに賭けつづける人びとが、都市世界の不確実性、自己の過剰性、他者の異

質性、それら自体を生きぬくための資源とし、活用していくことで成立している商世界」(p. 331) であると結論づけられる。

以上のように、本書は、ストイックなまでに商世界と商実践に特化した民族誌である。アフリカ都市の零細商人という、アフリカに行けば誰もが目にする「ありふれた」人びとについて、著者はその世界に深く沈み込み、読者にその独創的で豊かな営みをみせてくれる。なかでも「ウジャンジャ」という「芸術的」技法と、そこに生存を賭ける人たちの生き方や人間関係は大きな発見といえよう。

「なぜウジャンジャのような不確実な実践を商売にまぜるのか」「なぜリスクの高いマリ・カウリ取引をよく知らない人間と行うのか」など、わかりやすい問いをたて、それに対し商人の生の言葉と豊富な事例が引用され、明快に分析される。カメルーンの商世界を聞きかじった評者にとって、思わずうなずいてしまう言葉と分析に満ちあふれ、読んでいて驚嘆、共感しきりだった。決して調査するのが楽ではない零細商人の世界をこれほど精密に描き出した研究は世界でも類はなく、今後アフリカ都市を理解・研究する者にとって、必読書となるであろう。

ただ、気になるところもあった。まず、卸売商であるインド・パキスタン系商人への分析・記述が少ないことである。彼らがマチンガでないのがその理由であろうが、アフリカ系の古着小売商・中間卸売商がウジャンジャを駆使しつつもぎりぎりでしか商売を成り立たせられないのは、政府の弾圧や経済状況の変化とともに、古着商システムの末端にいる

せいでもあることは、著者もわかりきっているであろう。ないものねだりかもしれないが、もともと寄付など安価で集められる古着が、ビッグビジネスとしてアフリカを席卷したことやその商体系に関する著者なりの考えや理解は、述べておいてもよいのではないだろうか。

また、本書で分析される「マチンガ」の範囲についてである。著者が重点的に調査したのは古着商人であるが、とくに後半部などは、他のマチンガも一緒にして論じられている(本書のタイトルにも古着商人という言葉はない)。他のマチンガと古着商人の商実践や人間関係に違いはないということだろうか。たとえば評者の調査したカメルーンでは、古着商人は投機性が高く、零細商人のなかでも特殊な商売としてみられていた。カメルーンとの比較はともかく、ムアンザ市の他のマチンガと古着商人と違いがいかなるものかについては、もう少し詳しい説明が必要だったかと思われる。

しかし以上の点は、マチンガの生き方への共感に満ちた本書の価値をいささかも減じるものではない。

最後に著者をお願いである。本書に説得力と臨場感を与えている著者の商売体験は、本書では控えめに出てくるにすぎない。できればより開かれた形で書かれたその個人的商売体験を読んでみたいと思う。それは研究者だけでなく、アフリカに馴染みのない人たちのアフリカ理解の、貴重な手がかりになるはずだからである。

遠藤 環、『都市を生きる人々—バンコク・都市下層民のリスク対応』京都大学学術出版会、2011年、356p.

小川さやか*

本書は、バンコクの都市下層民の日々を生き抜くさまを、彼らによるリスクへの対応過程として捉え、長期フィールドワークによるデータを駆使して実証的に明らかにしたものである。本書は、労働と居住という都市貧困研究の主要テーマを扱いながらも、従来研究にいくつもの見直しを迫り、独自の都市下層社会・経済論を展開する研究書となっている。本稿では、まず本書全体の問題設定が提示されている第1章を整理する。その後、第2章以下について、本書が従来研究の再考を迫っている点に注目するかたちで概観する。

都市貧困研究およびインフォーマルセクター（以下IS）／インフォーマル経済（以下IE）論は、貧困やISの把握・定義を目的とした議論が中心であり、その関心の高さに比して都市下層の生活と経済のダイナミズムを捉えた実証研究が立ち遅れてきた。IS/IE研究の主流派は長らく、伝統部門と近代部門、ISとフォーマルセクター（以下FS）といった二分法や、前者から後者への移行を發展とみなす単線的發展論、向都人口移動からISの生成を説明する枠組みなどに大きな変更を加えてこなかった。現在では、都市内部の階層性に目を向け、二分法を批判する実証

研究なども数多く存在するが、地理学的な研究を除けば、農村と都市の連続性のうえに、IS経済の特徴を文化・社会論に還元する議論が多い。またグローバル化や世界的な都市・産業構造の変容にIEを位置づけた世界都市論者の研究も結局のところ、都市経済の内部構造を明らかにする実証研究を發展させなかった。

これら広範な研究を渉猟した本書の問題意識とは、都市下層民の生活・労働の動態に目を向けず、開発潮流の変化や分析概念の創出・刷新に伴い、対象や課題を「都合よく」転換する政策・理論が、実態と乖離している点にある。

本書の独自性は、都市下層民のリスク対応過程、都市下層コミュニティ・IE内部の動態、マクロ構造の変動の3者を有機的に結びつけたことにある。その狙いは次の3点である。第1に、レイオフやスラムにおける住居の撤去、火災といった都市下層民のリスクへの遭遇とその対応過程に光をあてることは、必然的に従来の静態的な都市貧困論に動態的な視座を導入することになる。第2に、病気や怪我など個人レベルのリスクから経済危機や政治不安といった国家レベルのリスクまで、リスクの重層的な発生をみることは、都市下層民の労働と生活の内在的ダイナミズムと都市のマクロな変動との相互作用を射程に入れることになる。第3に、リスクへの対応能力の違いを分析することで、都市下層民を規定する脆弱性や内部の階層化が浮かび上がる。

第2章では、タイの都市貧困政策とスラ

* 国立民族学博物館研究戦略センター

ム政策の変遷、およびその変遷過程で登場した IE 支援政策を、政策対象の実態に照らして考察し、それぞれの政策の意図と実態のずれを明らかにしている。

第 3 章では、調査方法と調査地である都心と郊外のふたつのコミュニティの概要が述べられる。これを踏まえて第 4 章と第 5 章では、コミュニティの職業と居住の各側面が掘り下げられる。職業に焦点を絞った第 4 章では、タイの文脈に即した職業階層分類が析出・設定され、各コミュニティの職業構成や各職業階層間やジェンダー間にみられる格差、人びとの職業選択理由など、第 7 章以降の分析の基礎となる情報が提示される。一方、居住を扱う第 5 章では、コミュニティの居住形態、居住空間としてのコミュニティの機能など、第 6 章での分析の布石となる情報が詳述される。

第 6 章以降が、住民のリスクへの対応過程に関する記述・分析である。第 6 章では、2004 年に起きた大火災の影響とコミュニティの復興過程が扱われる。都市住民の流動性を強調してきた従来研究の想定とは異なり、大部分の住民はさまざまな障害に直面したり、住居の再建案をめぐり分裂したりしながらも、焼け跡でのコミュニティ再生にこだわりをみせた。復興過程の追跡からみえてくるのは、さまざまなニーズや社会関係、機能が累積的・有機的に結合し、しっかりと都市に根を張るコミュニティの姿である。

第 7 章では、火災による職業への影響と階層化が分析される。火災は住居の喪失に留まらず、職業にも影響を及ぼした。特に居住

空間と密接にかかわる自営業者への打撃が甚大であった。高生産性自営業者は、低生産性自営業への事業転換や低生産性被雇用部門への参入を余儀なくされた。ここでは、伝統的な開発経済学で「上昇」とされる IS（自営業）から FS（被雇用部門）への移動が火災に伴う逆説的な対応として生じたこと、および人びとのリスク対応能力の差異と階層化が指摘される。

第 8 章では、女性のライフコースが丹念に分析される。特に 1990 年代のマクロ経済の再編の過程で工場を解雇された女性が、階層性を帯びながら IS へ参入していく過程が分析の中心になる。女性たちの対応は、学歴や資本などの個人条件だけでなく、世帯における役割や世帯内の協力関係の有無といった世帯条件にも規定されていた。女性が家計への貢献において補助的役割しか担わないという仮定は誤っており、彼女たちの家計への貢献は世帯の厚生水準に大きな影響を与える。また家計への貢献度が高く、世帯内協力関係が不均衡である女性ほど、現金稼得活動への制約条件が高まるという悪循環も示唆される。

第 9 章では、都市下層民の「上昇」イメージを、自立性と安定性というふたつの価値軸に着目して論じる。上述のように初期開発経済学では「上昇」とは、安定性の低い IS（自営業）から安定性の高い FS（被雇用部門）への参入を意味する。しかし被雇用部門のなかでも不安定な職種しか選択できない労働者にとっては、自立性を安定性より選好し、被雇用部門のほうを自立性の高い自営業の開業

資金を貯めるための一時的な待機地とみなす場合もある。さらにこの自営業内移動による「上昇」イメージも、学歴を武器に選択肢の限られた職業世界を抜け出すことを目指す世代で、変化することが示される。

終章では、各章の議論が整理された後に、著者による政策提言が試みられる。

以上みてきたように、本書では、従来の主流派の開発経済学やIS・スラム政策がいかにグローバル化に伴う諸現象の重層的な進展と都市内部の階層性を捉えきれていなかったのかを如実に示した。本書の知見の多くは、評者が研究対象とするタンザニアのスラムやIS研究をはじめ、タイの文脈を超えうる普遍性をもっているだろう。最後に、本書の価値を損なうものではないが、評者が感じた疑問について述べたいと思う。

本書がリスクとして明確なかたちで分析対象にしているのは、火災とレイオフのふたつである。しかし本書には、都市下層民が他にも多様なリスクを抱えているとする記述が散見される。また、個人や世帯レベルから地域や国家レベルまであらゆるレベルにリスクがあるとする記述もみられる。本書がどのような基準で特定の事象をリスクとして扱っているのかは不明瞭であり、リスクがブラックボックス化してしまっていないだろうか。

かつては人知の及ばない領域として考えられてきた事象の多くが、科学技術の発展や計画的な未来設計を可能とする均質的な時間管理の導入に伴い、予測したり管理すべきリスクとみなされるようになった。また社会の分化・制度化に伴い、リスクを予測したり管理

すべき主体が特定され、その達成の不履行に対して責任が問われるようになった。ここで監査文化や責任論について述べることは本書の議論から逸れるが、重要なことは「リスク」とは普遍的な実体ではなく、政治性を帯びた近代的な概念であることだ。つまり、特定の事象をリスクと位置づける試み自体が逆に、特定の現象へのローカルな対応のダイナミズムを捉えそこなう危険性もあるのではないだろうか。

たとえば、第9章の都市下層民にとっての「上昇」において、安定性より選好される価値は、自立性の他にも数多く想定できるように感じられた。彼らの人生観や職業観に取り込まれたとき、それが「リスク」とみなされるかどうかは、スパンやタイミング、危機の度合や対応能力による違いだけでなく、「どう生きるか／いかに生きたいか」にかかわる本質的かつ本能的な問いでもある。

リスクを切り口にこのような問いを深めていくことは、第1章で切り捨てた「文化や社会の議論に収斂しがちなIS研究」や、農村と都市との連続性／不連続性に関する議論をふたたび本書の射程に組み入れ直すことにならないだろうか。また、リスクや不確実性に関する理論的研究に取り組むことは、政策と実態に異なって作用する、近代化やグローバル化の「正体」を突き止めることにもつながるだろう。

とはいえ、このような問いを、都市人類学を専門とする評者に抱かせたことこそ、本書がすでに研究分野の壁を乗り越えていることの証左かもしれない。本書が地を這う努力に

よって価値の高い実証データを提示し、「内在的な視点」から都市内部の階層化やIS経済のダイナミズムを論じる意義を打ち出すことに成功していることは間違いない。データや事例が語ることから実のある理論を紡ぐという著者の姿勢には深く共感するし、学ぶことも多かった。本書は実証研究の底力を知ることのできる研究書であるだろう。

金子守恵、『土器づくりの民族誌—エチオピア女性職人の地縁技術』昭和堂、2011年、viii+287p.+xii.

木村大治*

表題に明快に示されているように、本書はエチオピアにおける土器製作の民族誌的記述である。エチオピア南西部に住む民族集団アリは、農耕活動をおこなう人々「カンツァ」と、物作りをおこなう職能集団「mana」に二分されるが、本書は「mana」の内の土器作り集団「ティラmana」を対象としている。土器作りをおこなうのは、もっぱら女性である。製作は個人単位でおこなわれ、できた土器は定期市に持って行って売られる。このように高度な産業化に至らず、社会に埋め込まれる形でゆったりとおこなわれている物作りを、本書では「地縁技術」と呼んでいる。

著者・金子守恵氏は、1998年からアリの土器作りの調査をおこなっている。本書はその調査の成果として2005年に提出された博

士論文がベースになっている。それではまず、目次から本書の内容をみてみたい。

はじめに 一どのように土器をつくっているのか？—

第一章 土器をつくる身体と生活のなか
いきる土器 第一節 ものづくりをめぐる研究 第二節 研究目的と方法
第三節 調査地概要

第二章 つかう 第一節 土器のつかい方
と所有個数 第二節 土器の分類・命名
第三節 一部の世帯で所有されている土器
第四節 土器の購入 第五節 創りだされる土器の種類

第三章 つくる 第一節 粘土の採取から、
成形、焼成まで 第二節 土器の成形過程—
「指使い」による成形過程の記述
第三節 成形過程の比較 第四節 土器をつくる身体

第四章 知る 第一節 技法の獲得と土器
づくりを知っていく状況 第二節 土器
づくりを知っていく—三年間の記録
第三節 土器づくりを知っていく過程—
SとG村の二人の娘の事例 第四節 ま
とめと考察

第五章 かわる 第一節 結婚と土器つく
り 第二節 職人のライフヒストリー
と土器づくりの変遷 第三節 職人の
テクノ・ライフヒストリー 第四節
テクノ・ライフヒストリー—人生の軌
跡に技術の変化を跡づける試み

第六章 うる、創る 第一節 生業として
の土器づくり 第二節 土器をめぐる

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

評価の仕方 第三節 新しい種類の土器が創りだされる過程 第四節 土器の態

第七章 地縁技術としての土器づくり 第一節 地縁技術としての土器づくり 第二節 職人によって文脈化される土器づくりの過程

このように本書では、アリ社会における土器の種類とその使い方、作り方、ライフヒストリーに沿った技法の習得過程、新しい形態の創造といったトピックが語られ、最後に「地縁技術」「文脈化」という概念によって全体のまとめが試みられている。

本書の最大の特徴は、ティラマナにおける土器製作のプロセスが、一貫して職人の「身体技法」という視点から語られていることだろう。以下、まずこの点について書いてみたい。よく知られているように、身体技法 (techniques du corps; techniques of the body) とはフランスの人類学者マルセル・モースの提唱した概念で、著者によると「人が伝統的な様態で身体を用いること (p. 9)」とされる。つまりそれは、歩き方、泳ぎ方、あるいは本書の対象となっている土器を作るやり方といった、およそ人間が身体を用いておこなうあらゆる習慣的行為に対して用いられる概念である。この概念が人類学的な記述において重要であり、また有効であることは言を待たないが、それを議論の前口上としてだけ使うのではなく、具体的に言語化して記述し分析するのは、実際は容易なことではない。本書でおこなわれているのは、その困難への挑

戦であるといつてよいだろう。

著者はアリの村に住み込んで、女性職人たちの土器作りを徹底的に観察し、また自ら土器作りの習得を試みる。その過程で、身体動作の記述の単位として「指使い」という概念が持ち込まれる。著者によると「手指の使い方に注目した分析は、著者が土器づくりの習得をすすめていく過程で、職人一人ひとりが自分の作り方の独自性を主張して、常に独自の手指の使い方に従って土器を作っていること、さらにその順番でなければ土器を完成することができない場面に遭遇した経験をもとにおこなったものである (p. 76)」と説明されている。具体的には「両手親指第1関節の腹を前後に動かす」とか「人差し指第1, 2関節の側面を反時計回りに動かす」といった微細なプロセスの記述で、合計20種類が区別されている。この「指使い」のいくつかをまとめたものが「工程単位」とされ、これらの概念を用いて、さまざまな土器の成形過程と、職人によるその違いが詳細に論じられる。

ここで読者は、エティック／イーミックの議論を想起するかもしれない。つまり、「指使い」は女性職人たち自身が認識し、言語化している単位なのか、それとも著者が分析のために持ち込んだ切り分けなのか、という疑問である。それについて著者は、「職人は、著者が分類した『指使い』を命名しているわけではない (p. 77)」が、しかし「彼女たちは、その『指使い』以外の方法で土器を成形することはない (p. 77)」と記している。また「工程単位」については、「職人による土

器つくりに関する動作名の命名の仕方によりそった（よりイーミックな）カテゴリー（p. 272）」であるとのことである。本書ではこのような形で、分析の利便性とイーミックな意味との折り合いがつけられているのである。

この「指使い」「工程単位」という概念を用いて、職人たちそれぞれの土器の成形を学んでいく様子が「テクノ・ライフヒストリー」という形で縦横に語られている。そこで明らかになるのは、ある程度規格化・共有化されてはいるが、しかし職人個人によって微妙に違ってくる土器作りのプロセスである。地域によって性質の違う粘土を使い、手捻りで成形し、野焼きをするというその過程では、どうしても体系化して語ることでできない微妙な差異が生じてくるのである。結婚前には大きな土器を立派に作る事ができたが、結婚して違う土地に移ってから、作る土器がなぜか壊れ続け、けっきょく小さな土器しか作らなくなった女性ダブリトの話（pp. 145-149）は、ほろ苦く胸に迫ってくる。そのような難しさをよく理解させてくれる事例である。

そういった状況を語るとき、本書に頻出するのが「アーニ」と「マルキ」というアリ語である。「アーニ」とは第一義的には「手」を意味するが、著者によると「アーニは、日本語の『手』と同様に多義的につかわれており、『手は知った（つくり方をおぼえた）』『手がよい（壊れずにつくる）』など調査中に少なくとも七つの用例を確認した（p. 88）」とのことである。つまり手の延長としての、土器作りの身体技法全体に対して用い

られる言葉だといえるだろう。この点については「彼女たちは、評判のよい職人のつくり方を真似しても、そこには個々の職人の身体にはじめから埋め込まれているような個性が存在しており、それぞれの身体をそのつくり方に単純にあわせるのが不可能であることを『アーニ』という言葉で表現しているのである（p. 246）」と書かれている。

また「マルキ」とは、第一義的には家畜、農作物、道具などの「種類」のことだが、「マルキがある、ない」という形で、人の手によって製作されたものを評価するとき用いられる。「マルキのある土器」とは、たんに規格に合致した土器というのではなく、「仮に職人が破格なサイズの土器をつくってしまったも、それがだれかの具体的かつ個別の状況や場面に適切なサイズであれば、その人にはマルキのある土器として評価され受け入れられていた（pp. 57-58）」。

このような形で「絶えず変化する関係の網の目のなかで、職人が素材に対して毎回異なるはたらきかけをすることによって成立している一回性の営み（p. 244）」は、土器作りを「文脈化」したときに実践されていると著者は論じている。「マルキ」は、そういった文脈化を語るためのキーワードとなっているのである。「マルキ」にせよ「アーニ」にせよ、土器職人たちの身体技法に根ざした、日本語にむかひに訳しがたい深い広がりをもっている。読後、私の心にいちばん残ったのはこれらの言葉であった。

以上述べてきたように、本書は身体を用いた物作りという、重要なことは明らかだが言

語化，記述が困難であった分野に挑戦した記録であり，そこから新たな方法論と成果が生み出されている。また，掲載されている写真も，職人たちの仕事ぶりを生き生きと示す，見ていて楽しいものだということを付けくわえておきたい。

最後にすこし問題点を指摘しておこう。まず残念なのは，せっかくおこなった著者自身による土器作りの体験が，具体的な記述としてほとんど盛り込まれてなかった点である。もし書けるものなら，今後ぜひ論文化して行ってほしい。もうひとつ思ったのは，出版の予定が急であったのだろうか，どうもあわてて書いて練り切れてないような部分が，全体の構成にも，また文章にも散見されるとい

う点である。些細な例だが，たとえば「キャベツ (p. 42)」と「ケール (p. 43)」はおそらく同じものだろうし，「イジャケン (p. 21)」と「イジャーケン (p. 87)」という個人名の記述も不統一がみられる。また，一般的な事象を論じるときにも，ほとんどの文末が「～た」「～た」「～た」といった形で過去形になっている部分が多く（たしかに観察自体は過去にしたものなのだが），若干の読みにくさを感じた。

しかしこれらの問題点は，本書の意義をそこなうものではもちろんない。「身体を使う」ことに関わる人類学に関心をもつすべての人に読んでいただきたい一冊である。